特集1

「中国の環境問題と環境政策」セッション

「植田先生と中国環境行財政システムの研究及び環境基礎人材育成への挑戦」

金　　紅　実（龍谷大学）

皆さん，おはようございます．ご紹介いただきました，龍谷大学の金紅実と申します．

先ほど何先生と孫先生の報告を聞きながら思いましたのは，環境経済学の中でも，植田先生の射程範囲は非常に広かったわけですが，中国の環境政策一つを捉えても，非常に幅広い領域まで先生はカバーしてくださったんだなということを，もう一度感じました．

私も植田先生にお世話になったのは非常に長く，約10年の長い時間があります．その間に，先生のご指導の下で進めてきた研究に関する思い出と，そして研究以外のところで社会貢献型研究・教育の推進として植田先生が取り組んでこられたいくつかの人材育成プロジェクトを私がそのサポートとして一緒に歩んできたので，それに関する思い出話を共有したいと思います．

簡単に紹介したいと思いますが，，私は2000年に修士課程に進学し，2002年に博士後期課程に進学をしました．大変恥ずかしいのですが，それから非常に長い間，植田先生のお世話になりました．

私が在籍していた時期というのは，もちろん私が中国人の博士後期課程の学生として初めてではなく，私の以前にも先輩がいらっしゃいましたし，当時は京都議定書が採択された直後でもありまして，これから東アジアの環境政策，地球環境問題をどう解決していくかに大変関心が集まり，その研究テーマが非常に話題になっていた時期でもあります．

その中で2000年以降というのは，中国の経済成長がいっそう急速化されるということもありまして，二酸化炭素の排出量や深刻な汚染問題を含めて東アジアの環境問題ないし世界の地球環境問題を解決する上でのキーワードとして，中国の環境問題を解決せずには，この時代の環境問題は解決にはならないと，植田先生が常々おっしゃっていたことを覚えております．

その他にも，日本の大学教育の在り方として，学問や研究成果を社会貢献や課題解決に結びつけることが大切であり，またそのような考え方をどうしていったらいいのか，その延長にあるものとして，国際社会，特に東アジア地域の国々が日本の経験を共有し，教訓として活かされることを強く望まれておられたので，植田先生はこの時期，大変生き生きとした姿で熱心に取り組まれてこられましたと思います．

まず，私の研究に関連して少しお話をしたいのですが，先ほど森先生の方から，植田先生の中国研究への関心は非常に早かったとい

う話もありましたし，何先生の話の中でも，植田先生が経済研究所の助手の時代から中国の環境問題の研究をされてきたということが紹介されました．ちょうど私が修士課程から博士後期課程に在籍していたころが，植田先生の中国の環境政策研究が本格的に始まった時期と重なる時期でもありました．

私の博士後期課程の研究テーマに関しては，一番よく二人で議論をしましたのは，環境問題というのは，資本主義の市場経済の失敗として捉えがちな傾向があるけれども，本来ならば健全な計画経済体制では発生し得ない，そのような問題ではないだろうか，なのに，なぜ社会主義計画経済の体制でも環境問題が発生するのか，その原因はどこにあるのか，についてずいぶん語った記憶があります．

その際の一つの切り口として，当時二人で話をしましたのは，，都留重人先生が1972年に取り上げた旧ソビエト共和国の環境問題を例にして，このような取り上げ方が切り口になり得ないかということを議論しました．

もう一つは，植田先生ご自身の1995年の本の中で言及された，都留先生に指摘された計画経済だからこそ起こり得る可能性，計画がうまくいかない場合，もしくは政府の発展戦略の中で開発か保全かの意思決定の中で開発経済の方に資源配分が偏った場合，環境問題が生じるようになるという話をしました．

同時に，植田先生のご指摘では，中国特有の社会的，経済的な構造上の問題として，1950年代，1960年代の中国がなぜソ連式の計画経済体制を採用したのかの視点でした．その中には，当時の帝国主義の政治的な，経済的な封鎖の中で，重工業化学を中心とした産業構造，要するに軍事国家としての道を歩まざるを得ないといった中国固有の問題があったのではないかという話をしました．

そうしたらならば，1980年代になって，中国が工業近代化を目指していく中で，当時の経済体制がどのような影響を与えてきたかの議論を交わした時に，いろいろと関連文献を読んだりとかして先生と議論をしたのですが，中国の社会主義市場経済の導入背景の一つとして指導的な理論的根拠となっていた鄧小平さんの「先富論」が大きな影響力を発揮してきたことに気づきます．

鄧小平さんは，遠い未来の社会的な公平性や富の分配の在り方を見据えながら，先富論の中で，一部の地域，一部の人を先に豊かにさせる，要するに格差もやむを得ないというようなスタンスがあったのではないか，と考えていました．しかも共産主義初期段階となる社会主義社会が高度な物質文明を前提とした福祉社会を目指すのであれば，資本主義社会と同じく環境問題や環境負荷は避けられない課題として現れたのではないかという話もしました．

そのような発展戦略を軸に，環境政策を国が制定し，それを実行する過程で，環境行財政が果たすべき役割は大きかったのではないかという話に発展したわけです．

2002年の植田先生の著書の中では，このような視点を含んだ環境行財政のあり方や大切な役割について言及されています．著書の中には「環境保全を行うために制定された法制度や政策を執行するための不可欠な存在として環境行財政制度があり，環境行財政システムがあって初めて政策や制度が執行されることになる」と見解を示しております．

その次は，環境行財政システムの中で環境

財政はどのように捉えられるべきかについて議論を交わしました．当時は，環境財政という概念が必ずしも明確に定着していたわけでもなかったのですが，92年に神野先生が，中国の環境財政の在り方を検討する中で，環境保全を政策課題とする環境政策のための財政であれば，環境財政として定義しておこうというのがありました．

これを踏まえて，先ほど森先生が説明された本の中にも出ておりますが，2009年の著書の中で，植田先生の場合は，神野先生のこのようなプラス的，積極的な財政以外に，実は開発財政による環境破壊や環境汚染といった要素も非常に重要ではないかということから，環境財政というのは，環境政策のために直接的に位置付けられた財政だけではなくて，開発財政による環境負荷やコストの問題も一緒に評価し，それを入れて算定すべきであると主張されます．

このような環境行財政システムの在り方，役割，そして環境財政とは何かという概念定義の議論の中で，私の博士論文の中国の環境行財政システムの実証研究が行われました．博士課程の研究実績及びその後の継続研究では，中国の30数年間の汚染対策がなかなかうまくいかない原因，特に環境政策の執行過程における環境行財政システムにおける原因が明らかにされた一方で，森林財政が同様の環境行財政システムの中でも非常に順調に発展していく現象を捉えることができました．このような視点や発見を含む研究成果を，2016年の私の『中国の環境行財政システム』の本の中に収めることができました．

この本の最後の章では，植田先生がずっと気になさってこられた，開発財政が如何にわれわれの身近にある自然を破壊してきたかの事例として，湖沼の埋め立て，またはダム建設によって生態系の破壊を行ってきたかを，1つの問題提起として陝西省と内モンゴルの境に位置するホンジェンノル（紅碱淖）という，砂漠湖の縮小現象について述べておきました．

最後にお伝えしたいことは，植田先生は，このような学問の研究だけではなくて，大学教育の在り方として課題解決への結び付きを非常に大事にされ，様々な教育事業，社会活動に取り組まれてこられた点です．植田先生は常常，国際社会，特に東アジアの環境問題を解決するためには，日本の苦い経験を周辺の国々と共有し，持続可能な社会の担い手としての裾の人材育成が非常に大事であるとおっしゃっていました．博士後期課程に進学したばかりの当時の私は，植田先生が熱心に次から次へと組み立てられたプログラムや事業について十分に理解できなかった面もありましたが，正規の中国人留学生を受け入れて京都大学で育成するプログラムや，現地の複数の大学と試みた遠隔講義，植田先生が直接に招かれて現地の大学や研究機構における講演会，中国教育部の長江学者として中国人民大学に招かれ行われた招聘講義などなど，直接に同行したケースや諸手続きの手配を手伝わせていただいた情景を今この脳裏に記憶しております．

少し抜けているところもあるかと思いますが，私が携わった植田先生の現地講演会，または現地の大学と協働した人材育成プログラムなど，この地図に記してみました．北京では中国人民大学や青華大学，北京大学のほか，研究機構として国家財政部財政経済研究所，

国家林業局経済発展研究センター，環境NGOである中国持続可能な発展学会などを挙げられます．西安では西北大学，上海では復旦大学，同済大学，武漢では武漢大学，西南財経法政大学，湖北経済大学，江西省の江西師範大学，海南島の海南大学など，植田先生の足跡はほぼ中国全土に及びました．招聘講座，出向講座などの形式をとおして大学が担うべき基礎人材育成の大切さや教育方法論，システムの創出などについて熱く語っておられました．

このような植田先生の環境基礎人材育成プログラムの経験や植田先生の思いを受け止めて，私は今の大学で，龍谷大学と南京大学金陵学院の相互訪問型の基礎人材育成プログラムを展開しております．このような植田先生の思いやいろんな示唆を胸に実践をしていく中で，現場で働く者として思っていますのは，植田先生の大変な心労と強い意志です．院生の頃は植田先生の身近な傍で，先生は本当に有能な方だな，研究プロジェクトにせよ人材育成プログラムにせよ，民間資金の獲得を含め非常に簡単に引っ張ってこられると思っていたのですが，自分がやってみて思ったことは，資金調達やネットワークの管理には大変な熱意と辛抱が必要であること，そして私が在籍していたあの10年間の植田先生の心労をしみじみに理解できるようになりました．

時間の関係で紹介は以上とさせていただきます．ありがとうございました．